

研究主題「古典に親しむ指導の工夫～主体的に授業に取り組む言語活動を通して～」

東京都教職員研修センター 研究部 研究課

昭島市立清泉中学校 教諭 乙幡英剛

研究のねらい

国語は、日常生活を営むための単なる方法としての言語というだけではなく、論理的思考力を支える根幹である。時代や社会の変化に対応できる普遍的な教養を身に付けるためにも、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことなどの言語能力の育成を一層重視しなければならない。

また、生きる力としての確かな学力や豊かな情緒、感性を養うとともに、国際人としての立場から、我が国の伝統や文化に対する理解を深める上で、改めて古典への興味・関心を高め、理解する力を養うことが課題となっている。教育課程審議会答申（平成10年7月）の国語の改善の基本方針にも「我が国の文化と伝統を尊重し、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成を重視する」としている。その一方で、古典の学習については、「暗記することが多く、苦痛である」「古典の作品そのものがつまらない」という理由から「興味・関心をもって学習しなかった」という生徒の実態も見られる。（平成12年度研究生報告書）

そこで、「古典に親しむ」ために、生徒一人一人が生涯にわたって主体的に教養を培い、古典に親しみ、学ぶことの楽しさを味わわせる授業方法の改善が課題であると考え、本研究の主題を設定した。

研究の内容と方法

1 研究の仮説

上記のねらいを受け、研究の仮説を以下のようにした。

- | |
|--|
| <p>(1)学習材を教科書にとどめず、生徒の興味を引くと思われる章・段を取り入れるとともに、現代語訳で提示するなど、古典学習への抵抗感を軽減すれば、生徒は意欲をもって古典の学習に取り組むだろう。</p> <p>(2)少人数学習班を形成し、明確な学習課題をもたせるとともに、話す・聞く・書く・読むなど多様な言語活動を組み合わせ、古典学習を活性化させれば、生徒は、主体的に授業に取り組み、より一層内容を理解する力を身に付けるだろう。</p> |
|--|

2 研究の内容と方法

研究の内容と方法は、以下のとおりである。

- | |
|---|
| <p>(1)基礎研究...古典教育のねらいをふまえ、生徒に育てたい力を明確にする。
「学習指導要領（中学校・国語）」及び「文化審議会答申（平成16年2月）」の分析</p> <p>(2)調査研究...古典教育の指導法の現状を把握し、課題とすべき点を明確にする。
各教科書における古典の取り扱いの比較、先行研究及び生徒・授業の実態の分析</p> <p>(3)実践研究...古典学習のねらいを明確にした指導計画を作成し、展開例を検証する。
古典学習のねらいを明確にした具体的な指導計画の作成及び授業の実践</p> |
|---|

研究の結果と考察

1 基礎研究の結果

「学習指導要領」には「古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる」こと、「文語における言葉のきまり」は「必要な範囲にとどめる」と記されている。また「文化審議

会答申」には「現在以上に、古典にふれることのできるような授業の在り方」の工夫や「言語活動を有機的に組み合わせる指導していくという観点」が大切であると記されている。

2 調査研究の結果

(1) 教科書の古典の取扱いに関する比較

第1学年で入門期にあった作品のあらすじは、第2学年以降姿を消し、本文の量や注釈が増加する。また内容的にも情緒や自然の美にかかわるものなど、より高次な理解力を必要とすることが分かった。

(2) 先行研究の分析

主題を「古典に親しむ」とした先行研究の実践例は、入門期に「群読」や「暗唱発表会」など、音読の工夫を行っている場合が多いことが分かった。

(3) 生徒及び授業の実態の把握

古典学習の実態について、次のような生徒の意識や授業の実態が分かった。

古典学習に関する生徒の意識について《片山富子氏（平成12年度研究生）のアンケート調査より》

- ・ 古典の学習が本格的になる中学2年時が、生徒を古典に親しませるポイントとなる。
- ・ 生徒は古典の内容が分かって、自分自身におもしろいものなら読む。

古典の授業の実態について

《粟国典子氏（沖縄県立教育センター平成12年）の研究より》

- ・ 教師主導の画一的な授業になりがちであり、生徒の興味・関心を育てるものになりにくい。
- ・ 言語活動は音読や暗唱が中心であり、単調な学習になりやすい。

3 実践研究の結果

(1) 指導計画作成にあたっての基本的な考え方

「古典に親しむ」ために、単元を「出会う」「ふれる」「味わう」の3段階に設定し、段階を追って生徒の関心・意欲を高め、理解を深めることを重視する。

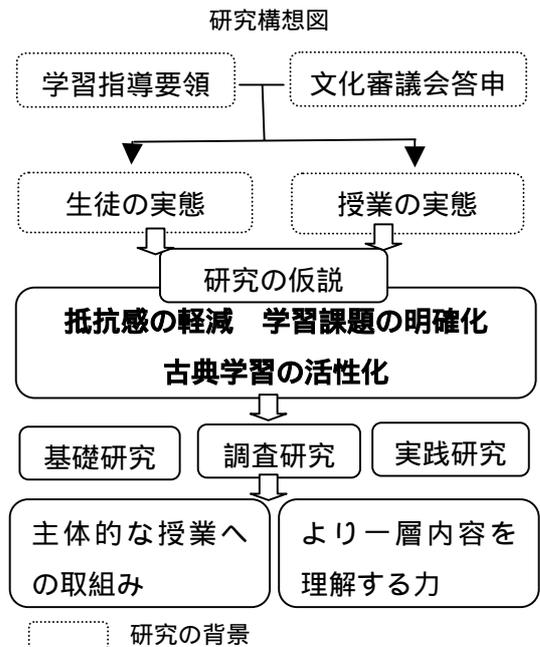
古典学習への抵抗感を軽減するため、「言葉のきまり」にかかわる学習（語句の意味、主語の省略、逐語訳など）を発展学習とする。

古典学習を活性化させるため、発表活動を中心とした班学習を取り入れる。

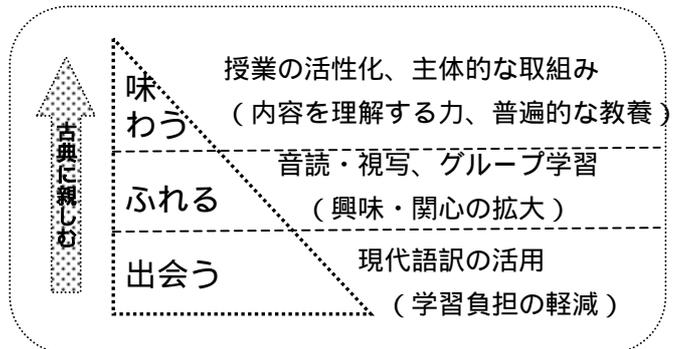
以上の点を考慮した上で指導計画を作成した。

(2) 指導計画

単元名（学年）「古典に親しむ」 古人の心 - 『徒然草』 - （中学校第2学年）



古典に親しむ段階（イメージ図）



指導計画（４時間）

	主な学習活動（親しむ手だて）	指導上の留意点	評価の観点（C：手だて）
（出会） 第一時	1 『徒然草』現代語訳を読み、興味をもった段の一次感想を書く。 2 一次感想を班で互いに読み合う。 3 2～3人の学習班を作り、「音読」「視写」「タイトル（内容の要約）」の係を決める。	・座席を班にする。 ・他者の感想を読み、感想を共有する。	B：他者の感想を積極的に読んでいる。【関】 （A：自分の感想と比較） （C：個別指導）
（ふれ） 第二時	1 学習班ごとに「発表シート」を作成する。 2 学習班ごとに発表の練習をする。 3 「発表シート」を提出する。 （回収し冊子にする）	・学習班ごとに話し合いながら作業をさせる。 ・互いに評価・交流をさせる。	B：ワークシート作成に意欲的に取り組んでいる【関】 （A：イラスト） （C：再度説明）
（味わ） 第三・四時	1 「発表シート」（冊子）をもとに、以下の流れに沿って発表を行う。 原文・訳文の音読 タイトル・教訓の説明 質疑応答 原文の斉読 2 他の生徒は、発表を聞いた感想（質問）を「記録シート」に記入する。 3 「徒然草」や兼好法師について感じたことを「まとめシート」に記入する。	・質問事項には、他の生徒にも考えさせる。 ・発表を聞いている生徒には、注意して聞きたい所を明確にさせる。	B：積極的に発表している【話】 （A：的確な説明） （C：授業のまとめで補足） B：自分の感想が書かれている。【書】 （A：疑問点の明示） （C：個別に再度説明）
（より親しむ） 発展	・印象に残った段を暗唱する。 ・語句、注釈をもとに、自分なりの訳を書く。 ・関連する書物を読む。 ・鎌倉時代の様子について調べる。	・図書室の活用を促す。 ・他教科との関連を図る。	B：積極的に取り組んでいる （A：疑問点の明示）

(3) 具体的な指導の工夫とその成果

古典学習への抵抗感の軽減

- ・生徒の古典学習への抵抗感を軽減し、古文への関心・意欲を高めるために、学習の導入部において、各教科書に掲載されている内容を含む15の段を現代語訳で提示した。
- ・取り上げる段の選定については、調査研究より「生徒の興味・関心のある題材」として「とんち・ユーモアにかかわる話」「幻想的・SF的な話」があげられていることを考慮し、取り入れた。
- ・生徒の発達段階に応じるために文章の量について、短いものからやや長いものまで幅をもたせた。

生徒の興味を集めたのは、71段、85段等の「兼好法師の人間観」にかかわる章・段である。既視感の体験や「人間の心」を扱った内容に共感が集まった。「面白い話や納得できる話があって、もっと読んでみたい」「長い話や短い話などたくさんあって面白かった」などの感想が多く寄せられたことから、今回用意した段の選定は適切であったと考えられる。また生徒の反応から「言葉のきまり」の扱いも含め、古典学習への抵抗感は軽減できたと言える。

学習課題の明確化

- ・基礎的な事項を徹底し、学習への意欲を高めるためには、個々の生徒に明確な学習課題をもたせることが重要である。そのために、発表シートを「音読」「視写」「タイトル（内容の要約）」の内容に分け、作成を各個人に分担する。
- ・少人数学習班を形成し、発表への準備を主体的に進めるとともに、互いに交流・評価を行う。

生徒は一人一人が意欲をもって各自の課題に取り組み、基礎を確実に身に付けていく手応えを感じていたようであった。まとめの感想には「みんなで作ったワークシートがとても勉強になった。音読など

声を出すことで、(古文の内容が)自分の頭に入って良かった。」「難しい言葉がたくさんあったけど、班の人と色々調べたりして読めるようになった。」などの記述が見られた。互いの分担を交流・評価することで伝え合うことができたと言える。今後は、生徒の発達段階に応じて計画的に授業時間を確保し、確実な学習活動を行うようにする工夫が必要である。

古典の学習活動の活性化

- ・内容の把握に重点を置くとともに、古文への抵抗感を減らすために一次感想の交流を行った。
- ・書く、読むだけでなく、話すこと・聞くことに関する言語活動を行うために、発表活動を設定した。
- ・発表を聞く際に、聞き取り方の要点を明確にした指導を行った。

第1に、生徒は現代語訳の感想を交流することで「(自分と)同じことを感じた人がいて嬉しい」「読んでみると内容が参考になる」など、古典への抵抗の軽減とともに、「徒然草」の内容に向き合おうとする姿が見られた。今回の検証授業では、感想を交流した人数の平均は一人あたり2.8人であった。今後は、より多くの交流を促し、より活発な感想・意見の交換ができるような工夫を行いたい。

第2に、発表を前提とすることで、準備には緊張感をもって真剣に取り組んでいた。生徒の感想には「発表は得意ではないけれど、音読を練習して本番では、ちゃんと読めてよかったです。」「自分が発表する時に緊張してしまったので、もっと練習をすれば良かった。」等、主体的に活動することで授業を作ることの充実感を表しているものが見られた。

第3に、「聞き取りシート」において、各個人で注意して聞く点を記入させ、目的を明確にして聞くことができるようにした。生徒の感想には「みんな分かりやすく説明してくれたので、意味がよく分からなかった文もちゃんと分かったと思いました。」など、級友の発表に関心をもって聞こうとする姿勢が見られた。

4 研究のまとめ

古典に親しむためには、これまで以上に、生徒が日常の授業に主体的に取り組むことが必要である。そのためには、教師主導で画一的な授業という従来の方法では、古文に親しませることは難しい。生徒の中には、古典を「難しい」「なじみにくい」と感じる一方で、「新鮮にうつる」「日本の誇るべき文化遺産」と答えたものも半数以上いるという調査もある。(「読売新聞」平成16年5月20日)

そのような声に応えるためにも、古典の授業の新たな可能性を探る必要がある。

今回の研究では、古典学習への生徒の抵抗感を軽減し、多様な言語活動を組み合わせた明確な学習課題を設定し、古典の学習活動の活性化を図ることで、生徒は主体的に授業に取り組み、より一層内容を理解する力を身に付けることが分かった。「昔と今でも考え方はほぼ同じ。ただ違うのは表現技法だけなのがとても不思議だった。」「『徒然草』は、世の中で身近に起きていることを書いた本だと思います。共感する点が多い本で分かりやすかったので、すらすら読めました。他にもおもしろい話があるので読んでみたいと思います。」という生徒の感想から、今回の授業では古典に親しみ、学ぶ楽しさを味わわせることができたと言える。

今後の課題は、古典に「より親しむ」観点から原文で鑑賞する等、学習を発展させることである。そのためには「情報センター」としての図書室の機能を有効に活用することが重要である。今後、こうした点を視野に入れた図書室の計画的な整備・充実への取組みも課題である。更に研究を深めていきたい。